



新開桜劇団の皆さんから感想が届きました

多くの方のおかげで、最大の難関である幅4m、高さ5.4mの新開桜のセットも完成させることができました。舞台上の転換も大変で、時には朝4時まで先生にご指導を頂く場面もありましたが、阿南市を題材としたこの舞台に関わられたことにとっても感謝しています。



山本 明さん (57歳・長生町)
裏方スタッフとして、大道具の制作や舞台転換などを担当。チームワークを結集して制作に取り組んだ新開桜の幹は、近くで見ても非常に精巧な出来栄でした。

西條愛実さん (19歳・宝田町)
現代の阿南で優希たちとミュージカルに取り組む少女、美緒役で出演。グループリーダーとして、本番・練習を問わず、子どもたちのまとめ役として活躍しました。

演技もリーダーの大役も、ミュージカル初挑戦の私には予想以上に大変で、正直辞めたいと思ったことも。でも、練習を進めるうちに仲間との絆も深まり、演技の楽しさを知ることができたので、最後まで頑張ったと思います。



初舞台で強く感じたことは、衣装や舞台を作ってくれる保護者やスタッフの方がいるから、役者と作品が生きるということでした。先生方や劇団の皆さん、応援して下さった方など、数え切れない方への感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



立田優詞さん (17歳・畷町)
戦国時代、新開入道道善の教子として登場する五郎丸役で出演。舞台で演技をするのは今回が初めてですが、しっかりした役作りで難しい役を演じ切りました。



公演の写真は、市ホームページ「広報編集長の小窓」でもご紹介しています。たくさんの方が涙した感動の舞台を写真で振り返りませんか。ぜひご覧ください。

レポート

市制施行55周年記念企画
市民劇団ふるさと創作ミュージカル



新開桜
Shingai Zakura



不屈の老将が新開桜に託した思いを
大好きなふるさと阿南で伝えよう

市制施行55周年を記念して企画された「市民劇団ふるさと創作ミュージカル『新開桜』」が5月5日、6日に夢ホールで本番を迎えました。舞台は日によって一部演者が異なるダブルキャスト方式で行われ、計4回の公演には、1326人の観客が詰めかけました。このミュージカルは、牛岐城趾に400年以上咲き続け、阿南を見守り続けてきた「新開桜」をテーマにしています。昨年の10月に公募された「新開桜」劇団の皆さんは、半年前から厳しい練習を重ね、また、大道具や衣装も、市民ボランティアや出演者の保護者が協力して制作。物語で重要な役割を果たす新開桜の巨大セットから出演者の草履まで、一つ一つを手作りしました。公演には、人形浄瑠璃座・中村園太夫座(新野町)や市内の劇団と交流のある劇団・気仙沼うを座(宮城県気仙沼市)も出演。そのほか、演出、振り付けなどを含め、総勢約130人の力を結集した大舞台となりました。

「最悪だー!!」。物語は、東京に住む中学3年生の少年、優希の切実な叫びから始まります。父親の借金にリストラ、自身の不登校…。そんな優希が、ひよんなことから両親の故郷、阿南を訪れることに。そこで優希は、新開桜の咲き誇る不思議な世界に迷い込み、戦国の世に生きる老将、新開入道善と出会います。人を思いやり、共感する「仁」の心。損得に関わらず、やるべきことをやり遂げる「義」の心。最初は現実から逃げてばかりだった優希も、道善の教えを胸に少しずつ成長していきます。不安や悩みを抱えながらも前を向くそのひたむきな姿は、大きな共感呼びました。出演者は、それぞれの役柄に応じた絶妙な演技を披露。その晴れやかな笑顔からは、ひとつの舞台をやり終えた達成感があふれていました。特に、桜吹雪が舞うなかでのフィナーレは迫力満点。会場全体が感動の渦に包み込まれました。

「大人になると忘れがち大切な心を思い出させてくれました」「阿南の歴史にも触れることができて、地元への愛着が増しました」。観客の皆さんも、不屈の老将が新開桜に託した未来への思いをしっかりと胸に受け取ったよう。公演後、明るくなった客席には、ハンカチで涙をぬぐう姿が多くみられました。

※題字は天羽直子さん(見能林町)